教育思想からみた子ども被服教育の可能性: 文化的、歴史的、物質的側面からの「まとうこと」の意味の先に

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2022-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山口, 理沙, Yamaguchi, Risa メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/2223

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

洗足論叢　第 50 号　2021 度

研究論文

教育思想からみた子ども被服教育の可能性

―文化的、歴史的、物質的側面からの「まとうこと」の意味の先に―

On Feasibility of Children's Dressing Education in the Philosophical Perspective
―Dressing Culturally, Historically, and Materially and further―

山　口　理　沙
Yamaguchi Risa

What you wear is how you present yourself to the world […]. Fashion is instant language.
--Miuccia Prada[1]

なにを着るかは、世界にあなたを示すこと。ファッションは即興の言語である。
ミウッチャ・プラダ

はじめに

教育学はなぜファッションを語らないのか。ファッションを語るとき、そこには虚栄心が満ちるかのように、また学習とはずいぶんと遠き概念であるかのように受け取られてきた。しかしながら、自分の身なりを整えることはひとにとって学習すべき内容のひとつではないのだろうか。ファッション、つまり、服をまとうことについて語ることは虚栄の顕れととらえるむきもある。ひとは、時や場所を考え、自ら身に着けるものを多かれ少なかれ考えなければならない。この「まとうこと」への関心はどのように教え、学ぶことが可能なのであろうか。ひいては教育学そのものが「まとうこと」についてどれほど向き合ってきたのであろうか。

啓蒙思想に端緒をなす子どものための服装は、長きにわたり、子どもの発達を意識したものではなかった。20 世紀以降、子どもの発達を考慮した服装が考案されるなかで、それらの服装は美学的側面での考慮はなされてきたのだろうか。つまり、身なりをととのえるという意味での、「身じまい」における、美的感覚（sense of beauty）とそのための完成（sensibility）について子どもたちに伝えてきたのだろうか。そもそも物理的に子どものために衣服を用意し、あてがう責任を負う大人自らが、服装を通したメッセージ性についてどれだけ意識してきたであろうか。大人の衣服のミニチュア版とした歴史的な子どもの衣服でも、アップリケ、大きなポケット等を携えた愛玩としての工夫を凝らした文化的な子どもの服装でもない、さらには、子どもの発達を考慮しただけの服装でもない、服装への教育の可能性はないのだろうか。

子どもは成長に伴い、身の回りのことを自ら整えていくことを学ぶ。自分の身体の一番外側を、時々

の気候、場所を含む状況に適して捉えることももちろん大切ではあるが、それに加えて、美しくまとうことへの理解について論究を進める。体を保護する以上に、「美しく」整えるということの重要性について教育学において考えてみたい。ここで「美しく」とは、外見を取り繕うことではない。単に自己顕示や、華美なことを指すのではない。いわば、素敵で心地のよい（nice and cozy）状況の覚知である。いわば美的感覚（sense of beauty）や、感性（sensibility）のことである。子どもにとって素敵で心地よいことの理解は、さらに広義には、生活において重要なのではないか。以上のことから、子どもに美しさへの感嘆、美しさへの理解を呼ぶ美的感覚を育むことを服装を通した「まとうこと」から、子どもが自ら考える契機となるための教育の可能性について、本研究では検討していく。

1　子どもと服の歴史

元来、西洋において、上流階級の子どもは、性別にかかわらず幼少期にはドレスを着用していた。このことは、現在においても、洗礼式といった通過儀礼的式典におけるベビードレスの着用からも思い起こすこともできよう。とりわけ裕福な家庭の子どもに限定されてしまうが、絵画においてその文化は確認することができる。例えば、ヴァン・ダイク（Anthony van Dyck）によるステュアート朝イングランド王チャールズ１世（Charles I of England）の子どもたちを描いたいくつかの絵画から、子ども達が成長する過程での装いの変化は確認することができる。例えば、＜チャールズ１世の子ども達（The Three Eldest Children of Charles I）[2]＞において描かれているのは、左から赤いドレスをまとうチャールズ、のちのイングランド王チャールズ２世（Charles II of England）、メアリ、のちのオラニエ公ウィレム２世妃（Mary, Princess Royal and Princess of Orange）、最後にジェームズ、のちのイングランド王ジェームズ２世（James II of England）である。

アンソニー・ヴァン・ダイク　＜チャールズ１世の子ども達＞

さきの絵画からおよそ2年後に描かれた＜チャールズ1世の5人の子ども達（The Five Eldest Children of Charles I）[3]＞では、前述の作品に向かって左に描かれていたチャールズは、今回は中心に描かれている。新たに右には、幼いエリザベスと、膝に抱かれるアンが加わっている。チャールズはドレスから、パンツへと服装が移行している。ジェームズはドレスを着用したままである。

アンソニー・ヴァン・ダイク　＜チャールズ1世の5人の子ども達＞

乳幼児期にはジェンダーにかかわらず、ドレスを着用し、その後、男児がパンツを着用し、女児が継続してドレスを（加えてコルセット）着用することにより、成人男性と成人女性と同等の着こなしから、大人と同等に扱われることが社会的に始まるのである。言うまでもなく、子どもは、アリエス（Ariès）が『〈子供〉の誕生：アンシァン・レジーム期の子供と家族生活』に示すいわゆる「小さい大人[4]」として認識されていたわけである。

庶民の場合においても、ジェンダーによる差異はなく、「単純なチュニック型の上衣」を着用しており、子どものことを考えた子どもに向けられた専用の服、いわゆる子ども服が存在してはおらず、大人の着古した衣服をあてがわれていた時代が続く[5]。子どもの服には、大人の当時のファッションが反映されており、既製服の登場とともに、その市場は拡がっていった。例えば、裕福な客層を対象としたルーヴル百貨店では、1860年代末に子ども服売り場を創設し、1870年代半ばには子ども服の通信販売を開始した。大人に連れられた子どもたちが大人の買い物中に飽きることがないよう、併せておもちゃの展示という工夫もみられた[6]。現代の商業施設においてみられる既成の子ども服の誕生である[7]。

三

2　教育思想にみる服装教育、ルソーからロックを遡って

教育思想のながれのなかではその間、ルソー（Rousseau）による「子どもの発見」が提唱され、子どもには子ども特有の発達の過程があることが見出されたことは大きい。子どもの装いの変遷は、同時に大人が抱く子どもへのイメージ、つまり子ども観の変遷とみることもできよう。つまり、大人が抱く子どもへのイメージ、子ども観の変遷に並行して、子どもの装いもまた変化を遂げたのである。ルソー

は著書『エミール』のなかで、子どもには簡素で行動しやすい装いを奨励している。それ以前にはなかった子どもへの配慮である。例えば、「生まれたばかりの子どもは、手足を伸ばしたり、動かしたりする必要がある[8]」として、頭巾や産着でしめつけることを決して推奨しない。

> 成長しつつある体の手足はすべて衣服のなかでゆっくりしていなければならない。その運動や成長をさまたげるものがあってはならない。なんでもあまりにぴったりしていたり、体にくっついていたりしてはいけない。フランスふうの衣服は大人にとっても窮屈で不健康だが、とくに子どもにとって有害だ。循環を妨げられてよどんだ体液はじっと一つところにとどまることになり、なにもしないで家のなかにばかりいる生活がさらにそれを助長して、体液は腐敗し、壊血病をひきおこす[9]

としている。色彩についてもルソーは細かく注文しており、

> 色には明るい色と暗い色とがある。前者は後者よりも子どもの好みに合っている。また、そのほうが子どもによくにあう。〔…〕しかし、子どもがこのほうがはでだからという理由である生地を選んだとしたら、かれらの心はすでにぜいたくにひかれ、人々の意見のあらゆる気まぐれに従っているのだ。そしてそういう好みは、たしかに、おのずから子どもの心に起こってくるものではない。衣服を選ぶこととそれを選ぶ動機がどんなに大きな影響を教育に与えているかはいうことができない。盲目な母親は子どもに褒美として身を飾る品物を約束するばかりでなく、無分別な教師が罰としてもっとそまつで飾りのない服を着させると言って生徒をおどかすようなことさえみられる。〔…〕人間は衣服だけで値打ちがあることを、あなたの価値はすべてあなたの衣服にあることを知らなければなりませんよ。こういう賢明な教訓が若者のためになり、かれらが身を飾るものだけを高く評価し、見かけによってのみ価値を判断するとしても驚く必要があろうか[10]

と、提言している。残念ながらなぜ明るい色が好ましいかについてこれ以上展開は見られないものの、ゲーテ（Goethe）の色彩論以前に子どもが好む色の効果について論及していることは、注目に値するのではないか。

加えてルソーは、「もっとも質素で着心地のいい服、一番かれの体をしめつけることがない服、それがいつも子どもにとってはいちばんありがたい衣服[11]」であるとするのである。また季節や、動きに応じて服を調整すること、とりわけ、子どもに厚着をさせ過ぎていることに警笛を鳴らしている。

四

ただし、現代において『エミール』を引く際、背景として理解しておくべきことがらとして、ルソーが男児と女児の教育を別に考えていたということである。言うまでもなく、『エミール』とは、男児の教育の物語であり、そのエミールが成人した際にふさわしい女性となる女児、ソフィーの物語を、ルソーは分けて記す[12]。現代において、全面的に継承することはできないが、男女に分けたうえでなお、ルソーは体をしめつけない服装を重んじている。当時すでに、コルセットの濫用に警笛を鳴らしていることは注目に値する。

また、ルソーは自分の身なりを整える術を、ソフィーの教育、つまり女子教育において人形遊びに見

出している。当時、子どもの遊びをこれだけ注意深く観察し理解する碩学がいたであろうか。「まとうこと」の教育への手がかりとしても重要となるため、いくぶん長いが下記に引いてみたい。

> 小さい女の子が一日じゅうお人形を相手にしているのを見るがいい。ひっきりなしに衣装を変え、いくたびとなく服をきせ、ぬがせ、良く似合っても似合わなくてもかまわずに、たえず新しい組み合わせの身の飾りを工夫している。指には器用さが欠けているし、趣味も形づくられていないが、好みがもうはっきりとあらわれている。そういう果てしない仕事をしているうちに時は知らない間にすぎさっていく。〔…〕その子にはお人形は見えるが、自分は見えない。自分のためにはなにもすることができない、その子はまだできあがっていない、才能も体力もない、まだなにものでもなく、すべてはお人形のうちにあって、そこにあらゆる嬌態を見せているのだ。その子はいつまでもそういうことにうちこんではいまい、やがては自分自身がお人形になるときがくる[13]。

ここからルソーは女子教育として裁縫、刺繍やレースの技術獲得を促すのである。ただし、着飾ることだけが、身なりを整えることだとはしない。むしろ華美からは遠いその精神を重んじるのである。

> 〔…〕服装のことをよく知っている女性は、よいものを選んで、いつでもそれを用いている。そしてまいにち変えるようなことはしないから、どれにきめたらいいのかわからないでいる女性のように衣装を気にすることはない。身の装いについてまともな心掛けをもっているひとはおしゃれなどほとんど必要としない。ちゃんとした家のお嬢さまがたはめったに大がかりなお化粧などしない。仕事や勉強で一日をすごしている。それにもかかわらず、一般に、そういうひとたちは、紅などつけないが、貴婦人たちと同じくらい入念に、しかもしばしばいっそうよい趣味で、身じまいをしている[14]。

このようにルソーによって示される「よい趣味」による「身じまい」こそ、本研究における「まとうこと」を教育において扱う際の手がかりとなる。美的感覚（sense of Beauty）や、感性（sensibility）の教育である。

ここで時代を遡り、ルソー以前に、子どものしめつけない衣服の重要性と、身なりの整え方について言及したロック（Locke）の考えを確認したい。ロックは、『子どもの教育』においてルソー同様に、しめつけない衣服の重要性について説く。子どもの厚着による弊害についてもルソーに先んじて指摘しているのである。ただし、ロックもまた、同様に、子どもとは、男児であり、「若いジェントルマンとなるべき者は幼児からどのような育てられ方をされるべきかという点[15]」に主たる目的を置くことを公言している。そのことを考慮したうえでなお、子どもにとって快適な衣服がここに示されたことは、子ども史において看過することはできない。ルソーは『エミール』において、ロックの本著を視野にいれており、両者ともにおおむね子どもらしい衣服については共通項を見出すことができるよう[16]。

加えて、両者ともに、衣服が人体を保護するのみならず、身じまい、品性について指摘しているのである。例えば、ロックが『子どもの教育』において示す教育とは、ジェントルマンを育成する手段であった。ジェントルマンたる者がどのような存在であるかは、ロック自身が示すジェントルマンの資質

を捉える視点から近づくことができよう。それは、「しつけの良さ」である。作法や品性を重んじるロックにとって、「まとうこと」は、自分を誇示するものとは読み取れない。事実、ロックは、「気どり」を忌み嫌い、懸念する。

> 気取りというものは、未開の荒れ野に生える雑草ではなく、庭師が手入れをさぼったり世話がゆきとどかないために、庭園にはびこる雑草のようなものです。子育て、教育、そしてしつけが必要だという感覚、これらはすべて、人に気どることができるようにさせるうえで必要なものです。気どりというものは、生まれながらの欠点を直そうと努力し、人に気に入られるという立派な目的をもっていますが、いつもそれを果たせないもの[17]

と指摘している。逆説めいているが、気どりを否定するのではなく、気どることができるからこそ、そうあってはならないという認識から教育の必要性が再認識されるのである。以上のように、ロックの示す「気どることがない」、また、ルソーの示す「よい趣味」は、果たしてどのように子どもに伝えることが可能であろうか。また、子どもが自ら学ぶことが可能なのだろうか。臨床的教育学の視点から、この教育の言説において指し示されることをどのように考えることができるのだろうか。

3 「まとうこと」への教育の可能性

被服を表現（expression）であり、印象（impression）としたとき、それらは子どもの発達において教育すべき営みのひとつと考えられるのではなかろうか。はじめに強調しておきたいことは、すべての子どもが「正しく」服を身に着けることをここでは指し示すものではないということである。なんらかの「正しい」服装があり、子どもをその型にはめることを推し進めるものではない。それにより、ここで没個性の懸念や、鋳型にはめ込む危険性については回避される。本研究が射程とするのは、状況に応じて、自らの服装について自ら思考し、実行することができる促しである。

では、これまで教育において服装がどれだけ教育内容としてあつかわれてきたのであろうか。就学児童においては、それは家庭科教育における学習単元として提示されている。ただし、そこに「まとうこと」を自ら表現し、印象を残す営みとして子ども達が考える実践が示されてきたであろうか。

例えば、松本（2016a; 2016b; 2016c; 2016d）は、初等教育、中等教育における被服教育いわゆる家庭科教育における「おしゃれ教育」は、学習指導要領に着こなしについての内容が含まれているにもかかわらず実際には授業においてその扱いは不十分であることを指摘している。ライフスタイルの変化、例えば、家庭でのミシンの活用率の低下や、既製服の一般化を十分に照らしたものではないと指摘している。まとうことへの正しい知識、これを松本は、「おしゃれリテラシー」と示すが、外見上の美しさやかっこよさだけではなく、被服の多面的機能を育てる必要があることがここでは提言されている[18]。加えて昨今、持続可能な社会のためのファッションビジネスが打ち立てられていることからも、子どもに対して、まとうことへの教育が時代に対応したものである必要性は明らかであろう。以上のことから、松本は、今日的問題としての被服教育の現状、被服教育について教科書における扱い、児童および生徒

がふれる被服についての情報源としてのファッション雑誌の内容、それらをふまえた被服教育のカリキュラムの提案を行っている。

ローティーン向けであれば、海外においては、「まとうこと」への関心を子どもに示す児童文学も確認できる。

> きみは、ジェームズ・ボンドがエレガントなパーティーに短パンで行っているのを見たことがあるか？答えはノー。彼はいつも完璧な着こなしだ。黒のタキシードをばっちりキメている。正しい着こなしを学ぶのはとても大切なことだ。〔…〕正しい着こなしとは、必要なときに必要なものを着るっていうことだ。TPO におうじて、服装を使いわけないといけない。フットサルをするときにジャケットはいらない。結婚式に出席するのに水着っていうのもおかしいよね。〔…〕きみがまず第一にすることは、いろいろな服があることを知り、それらをどのように組み合わせるかを知ることだ[19]。

現代、映画 007 シリーズについては PG-13 であり、ローティーンが観るにふさわしいかは各家庭にゆだねられているであろう。しかしながら、概念としてのジェームズ・ボンドについては、欧米において広く浸透しており、この場合、エレガンスとはなにかについて伝える比喩としては成立していると考えられる。ただし、前述のとおり、日本においてこのようないわゆる「よい趣味」による「身じまい」が俎上にあがることは未だ成熟をみない。そもそも「まとうこと」が課題として扱われないからである。

子どもに「まとうこと」の意味について示すことが少ないなかで、日本において、鷲田による 3 冊のシリーズによる児童書は、体系的にその意味について子どもに提示することに成功している。人がなぜ服を着るのか、記号としての服や、ファッションの意味や役割、服の歴史的変遷について子どもが理解できる言葉で哲学および心理学、社会学的な見地から触れる。加えて、内容を受けて、実際に服装についてのディベートを行うことを可能とさせる題材についても導いている[20]。例えば、「「おしゃれは自由」、Yes or No」、「「制服」に賛成か反対か」、「「見た目が大事」イエスかノーか」といった試みが示されている。鷲田は服装にまつわる表現と印象について、細やかにかみ砕いた言葉を選び子どもに示す。服はからだの特徴を増幅するものであり、服は自らを変える道具であるとする。いわば服は「第二の皮膚」として示される。この意味において、服は社会的な記号として扱われ、人々のコミュニケーションを「おぎなう」道具として扱われるのである。このような概念理解こそが、単純に服の素材や製法について伝える以前に理解すべきことではないか。鷲田は、このことを、下記のように子どもたちに示す。

七

> 服にはとてもふしぎな力があります。着る人の個性をあらわすのが服の力なら、いろいろな人とコミュニケーションをできるようにするのも服のもつ力です[21]。

> 最近「食育」が流行っていて、食については、きみたちも考えることがよくあるけれど、着ることについて考えるということは、あまりないよね。それどころか、なぜか服については、「うわべの問題」、「外見の問題」とされ軽く見られているように思うよ。でも、現代人は服なしでは生きていけな

いよね。災害のときだって、支援物資としてまず最初に届けられるのが、食料品と衣料品だよ。それは、食と衣は、人が人として生きることの根本をかたちづくっているものだからなんだ[22]。

しかしながら、鷲田の児童書をもってなお、対象者は就学児童の年齢になってしまう。それ以前に、「まとうこと」を子どもたちに示すことはできないのであろうか。つまり、これらの児童書は、小学校就学後の児童には理解できるが、それ以前の子ども達にはいささか難しい提言となってしまう。

例えば、気候や、その日の予定、つまりその日会う相手や訪れる場所、物語を織り込むことにより、子どもが自ら考え、今の自分にふさわしい装い考えだすことを導くためには、どのような方法があるだろうか。より幼い子どもたちへ示すことのできる絵本において、服装教育の可能性を見出すことはできないだろうか。次節では、その方法のひとつとして、絵本を通した学びを提言したい。

4　絵本を通した被服教育

絵本において「まとうこと」を扱う作品は散見する。子どもたちの人生の早い段階で、自ら服を着脱することは、生活において大きなひとつの営みであり、関心ごととして扱われるからである。

例えば、管見では、『くつくつあるけ（林明子 文・絵）（1986 福音館書店）』は、「まとうこと」によってできることを示し、その楽しさについて気持ちを共有することができる。また、『どうすればいいのかな？（わたなべしげお 文、おおともやすお 絵）（1980 福音館書店）』では、衣服の正しい位置から頭や手を出すという着脱について子どもと気持ちを共有していくことができよう。

イマジネーションを養う絵本であり、また服装を共有することによるユーモアや喜びについて扱う絵本としては、『ねずみくんのチョッキ（なかえよしを 文、上野紀子 絵）（1974 ポプラ社）』や『わたしのワンピース（にしまきかやこ 文・絵）（1969 こぐま社）』、『はるのワンピースをつくりに（石井睦美 文、布川愛子 絵）（2018 ブロンズ新社）』等を通じて感じることができる。

また、服ができるまでの工程を知ることから、身近な洋服へのいっそうの愛着を抱くことができる絵本、たとえば、『ペレのあたらしいふく（エルサ・ベスコフ 文・絵、おのでらゆりこ 訳）（1912=1976 福音館書店）』や『もぐらとずぼん（エドアルド・ペチシカ 文、ズデネック・ミレル 絵、うちだりさこ 訳）（1960=1967 福音館書店）』、も挙げられよう。より科学的に服の素材を理解するためには、『ふくはなにからできてるの？（佐藤哲也 文、網中いずる 絵）（2016 福音館書店）』を通して、繊維の仕組みや洗濯方法が理解できる。

古い時代のものを愛でるという気持ちを共有する絵本として、『おしゃれなクララとおばあちゃんのぼうし（エイミー デ・ラ・ヘイ 文、エミリー サットン 絵、たかおゆうこ訳）（2011=2015 徳間書店）』や『ヨセフのだいじなコート（シムズ タバック 文・絵、木坂涼 訳（1999=2001 フレーベル館）』を取り上げることもできるのではないか。新しいものに子どもたちは惹かれるばかりでなく、古いもの、この場合は時代性ではなく着古したもの、にこそ子どもたちは惹かれる気持ちを汲み取った『わたしのぼうし（さのようこ 文・絵）（1976 ポプラ社）』からは、なんらかの事態により、古い服装を手放したとしても、新しい服装を通して体験できる楽しさについて示唆が確認できる。古い時代性、

そして、自身の着古したものという意味双方が示される絵本としては、『おじいちゃんのコート（ジム エイルズワース 文、バーバラ マクリントック 絵、福本友美子 訳）（2014=2015 ほるぷ出版）』が挙げられよう。

職業に関連した服装、とりわけ正装についての絵本としては、『105 人のすてきなしごと（カーラ・カスキン 文、マーク・シーモント 絵、なかがわちひろ訳）（1982=2012 あすなろ書房）』や、服装を職業とするデザイナーに関する絵本、ココ・シャネルの生涯と仕事について描いた『ココとリトル・ブラック・ドレス（アンネマリー・ファン・ハーリンゲン 文・絵、川原あかね 訳）（2015=2016 文化出版局）』や『COCO はとびきりかわったコ（エリザベス・マシューズ 文・絵、佐伯誠 訳）（2007=2008 イプシロン出版企画）』、エルザ・スキャパレリについての『ショッキングピンク・ショック！（キョウ・マクレア 文、ジュリー・モースタッド 絵、八木恭子訳）（2018=2018 フレーベル館）』等も昨今登場している。

身体の困難にも関連して扱われる絵本として『ポケットのないカンガルー（エミイ・ペイン 文・H.A. レイ 絵・西内ミナミ 訳）（1944=1994 偕成社）』は現代の社会性にも通じる書籍であり、また「まとうこと」によって自己の拡張を示唆する作品でもある。体を補うものとしての服装の役割について考えることができる。加えて、ジェンダーに対応した「まとうこと」への前向きな気持ち、自分にふさわしい装いを考える契機となる絵本として、『ジュリアンはマーメード（ジェシカ・ラブ 文・絵・横山和江 訳）（2018=2020 サウザンブックス社）』や、『せかいでさいしょにズボンをはいた女の子（キース・ネグレー文・絵・石井睦美 訳）（2019=2020 光村教育図書）』も近年刊行された絵本のなかでも、時代を映す作品として看過することはできない。

このように、子ども達の生活をめぐるなかで、「まとうこと」へのテーマは多数存在し、絵本の物語を通してもまた、それらを考えるきっかけを与えてくれるのである。

5 「まとうこと」について語るとき子どもが語ること

「まとうこと」について子どもが語るとき、子どもはなにを語るのだろうか。子どもがファッションに触れるとき、それはまわりの大人が用意する環境のなかで、自分の嗜好をどれだけ叶えることができるのだろうか。体温調節を含めた、生命維持のための服装への配慮は大人がすべき事柄ではあるが、それ以外の関心ごととして、子どもが好きな服を好きなように身に着けるということについて、大人はどれだけ促すことができるだろうか。

なぜそれがすきなのか、なぜそれをよいとするのか、その理由を他者に明示する、明示し合うことにより、「主体的」、「対話的」な思考を促してみてはどうだろうか。相手が好ましいとするものを傾聴し、自己の好ましいとするものを示すことにより、主体的な嗜好の提示、また他者の嗜好の尊重、そしていかにそれらを好ましいとするかの対話が可能となるならば、それは子どもにとって多様な意見との出会いともいえよう。例えば、絵画をとおした感性についての対話からは、4 歳で既に、それがすきである理由を言葉によって表現することが可能であることが明らかとなっている[23]。そうであるならば、子どもが、まさに今日その日に身につける服装についても、その一日にふさわしいと子どもが自ら考え

九

を導き出すような可能性の機会なのではないか。活動としての美学の学習ではない、生活を通した「まとうこと」への意識化により、子どもたちが状況に応じ、かつ自ら好ましいと思われる装いをおこなう体験をするのではないだろうか。「まとうこと」への積極的なこだわりを、単に表層の装飾とみる隘路に陥ることなく、所与にその営みを扱うことで、美的感覚（sense of Beauty）そして、感性（sensibility）の教育の機会として捉える可能性をこのように本研究では提言したい。装いについて意図的になることは、決して虚栄、またいわゆるルッキズムやセクシズムを導くものであってはならず、むしろその場と、その時に自ら身を置くにあたってふさわしさを考える機会となることを図る。

では相手に敬意を示した装い、翻って、相手の装いへの敬意、季節に合わせた装い、今の自分の気持ちを表現した装い、多角的な考慮のもと、自分を表現する手段を子どもたちが獲得するために学ぶ機会はどこにあるのだろうか。家庭での教育に任されるのみならず、幼児教育、初等教育、および中等教育において多くの議論が子ども達のなかで語られる可能性を探りたい。このことを考える余地が、教育にはまだあるように考えられる。

とりわけ乳幼児期の子どもにとって、「自己」の思考や感性を表現する意識と、「他者」や「状況」が求めるものに思いを巡らせることの多角的な視点、多様な視点を獲得する途上において、子どもが「まとうこと」への意識を向ける機会を獲得することは有用なのではないか。子ども期においてはそれは自我の目覚めの契機ともなりえ、また、思春期においては、自己肯定、他者理解を含めた衣服をとおした表現へと接続されていくのではないか。このように捉える試みは緒についたばかりであるが、教育の言説から考える「まとうこと」の教育、またその実践の可能性は開かれていると考えられよう。

おわりに

以上、本研究では、子ども服の歴史、そして教育思想の側面から、子どもについての「まとうこと」を考察した。改めて示すと、ここで被服教育の新たな可能性とは、子どもに対して「こうあるべき」と着るもの、着こなしを押し付ける大人からの社会的圧力による模範的、規範的な「正しく」まとうことの理解ではない。そうではなく、「まとう」とは、そもそもどのような営みなのか、子どもたち自らが考え、自らまとうものを選び取ることができることを射程とした。またそこでは、他者の嗜好を批判的に受け取るのではなく、尊重することも重要となってくる。ルソーや、とりわけロックの引用で示したとおり「まとうこと」についての教育というと、階層が限定される教育、とみなす向きもあろう。また、洋装における文化共有のなかでのみ成立する教育とみなす向きも推測される。しかしながら、季節や場所に応じた装いや、装うことの楽しさについて、限定して必要とされるものではない。広く子どもたちが考える契機は予想されることを念頭に、具体的な方法論については稿を改めて提示したい。

「まとうこと」が目的となってしまうのではなく、「まとうこと」はあくまでも手段として、我々が我々で在るということの表現として、自己の在り方を問うひとつの問いとして子どもたちとともに考える機会を大切にしたい。「まとうこと」について、ルソーは真理を示す。最後に再びルソーに還ることから、結びとしたい。

衣装は一目をひくことはできても、人はその人自身によってのみほかの人を喜ばせる。わたしたちの着ているものはわたしたちそのものではない。あまり服装に凝るとかえってみっともないことになる、というのはよくあることだし、着ているひとをもっともよく目立たせる服装はもっとも目立たない服装であるばあいもよくあることだ[24]。

謝辞

クレヨンハウスの馬場里菜様と鏡鉄平様、野村陽子様には、保育学生や子どもにあった上質の絵本をご紹介いただいている。本研究を進めるにあたって、とりわけ今回は、絵本にみる服装教育についてたくさんのご助言を頂戴した。筆者ひとりでは拓くことの叶わない膨大な絵本についてお示しいただいた。一つひとつの物語のすてきな帳をいつも開いていただいている。ここに御礼申し上げたい。

また、島根県立石見美術館の田中志依様には、美術館の貴重な資料を提供いただいた。コロナ禍、国内の美術館、大学図書館へのアクセスが難航する中、それでも研究が滞ることなく進められたことを、ここに感謝申し上げたい。

注

1 Galloni 2007: (online) https://www.wsj.com/articles/SB116907065754279376. Retrieved 2020-04-20.

2 Van Dyck, Anthony. 1635, oil on canvas, トリノ , サバウダ美術館 .

3 Van Dyck, Anthony. (copy) [1637] oil on canvas, ロンドン , ナショナル・ポートレート・ギャラー .

4 本研究においても子ども服の様子を知るうえで倣ったのは、アリエスによる子どもの発見の手法である。絵画には、当時の文化や価値観にてらした対象が描かれており、その意味で価値観が凝縮されたものであり大変有効な参考史料といえよう。限定された階層ではあるものの、写真がなかった当時の、子どもの様子がみてとれる。

5 Ewing 1977=2016: 23-24 西洋の子ども服の変遷については、ユウィングがその黎明期から大量生産に至るまでを丁寧に辿っており、本研究においてもその歴史的解釈に倣った。

6 新實 2019: 7-12

7 現代、子ども服に関してのみならず、一般に衣服は既製品を求めることが大多数であろう。黄による日本と中国における子ども服衣料品の購買についての調査では、子どもの服の消費者、つまり保護者が子どものための衣料品を購入する際に追求することの上位が「品質追求」であることがわかる。黄によると、「基本確保」、子どもの服としての基本的役割、つまり機能についてや、「ハイセンス」洋服の美しさ、スタイル性をはるかに超えて、衣料品の品質を重視する子育て家庭が多いことは、日本のみならず中国においても同様であった（黄 2019)。子育て家庭において、質の良い衣料品を子どもにあてがうという配慮はあっても、まとうことの意味についての教育的配慮にまで議論は届かない現状がわかる。

8 Rousseau 1961[1762]=1962a: 34.

9 *ibid.*: 205-206

10 *ibid.*: 206-207 ルソーが『エミール』において展開する教育論は、モンテーニュや、フェヌロン、ロックを下敷きにしていることは、文中でも確認できるが、ロックのとりわけ “Some Thoughts Concerning Education (1690)” を意識しつつも、ロックに不足していることとして、子どもへの服装についてここで細やかに指摘

していることが確認できる。

11　*ibid*.: 207

12　ルソーは「男と女とは、性格においても、体質においても、同じように作られてはいないし、同じようにつくられるべきでもないということが証明されれば、「男と女とは同じ教育をうけるべきではないということになる。男と女とは、自然の指示にしたがって、協力して行動しなければならないが、同じことをなすべきでは仕事の目標は共通だが、仕事そのものはちがっている。したがってまた、仕事を方向づける好みもちがっている。自然の男子を育て上げる努力をしたあとで、わたしたちの仕事を未完成に終わらせないために、こんどは、自然の男子にふさわしい女性はどんなふうに育てられなければならないかをみることにしよう（Rousseau 1961[1762]=1962b: 17）」として、『エミール』の終盤に、青年エミールにふさわしい女性、ソフィーのための教育を記している。現代のポリティカル・コレクトネスからは遥か遠いものではあるが、18世紀の西欧においての男女間である。また、『エミール』それ自体がルソーの思考実験であり、実際の教育方法ではないということも加えて意識したうえで受け取る必要があろう。

13　*ibid*.: 26-27

14　*ibid*.: 38

15　Locke 1693=2011: 8

16　ユウィングは、後世へのインパクトは『エミール』のほうが大きいものの、ルソー本人がロックに負うところが大いにあると指摘していることからも、半世紀先んじて当時普及していた窮屈なファッション（大人服のレプリカ）を前に、子ども服の生地の重さや締め付けを批判したロックを高く評価している（Ewing 1977=2016: 48-49）。

17　Locke 1693=2011: 64

18　松本 2016a: 152

19　Baccalario and Jáuregui 2017=2018: 119

20　鷲田の言説からは、自己の拡張としての服装が示されている。しかしながら、自己の拡張や自己表現を考える際、以降の現代においては、インターネットにおけるアバターもまた、服装と同様の表現と印象を与える時代となった。例えばそれは、任天堂によるゲーム「あつまれ どうぶつの森」における自己表現への熱狂からも明らかではないか。また、身体に困難を抱える人々が外出の体験を可能とする分身ロボット、Orihimeは、そのロボットに着せる衣服も選択することができる。人々が実際の肉体に身に着ける衣服によってのみ自身を表現し、人々が印象を受け取る時代に変化が起きているとも考えられる。自己とはどこまでを指すのか、そして「まとうこと」の変化について考えていく必要があろう。このことを考える契機を与えてくれたOrihimeを通した交流については、伊藤亜紗による記述が示唆に富む（伊藤 2021:28）。

21　鷲田 2007a: 3

22　鷲田 *ibid*.: 23

23　子ども哲学の側面から、絵画を用いた子ども自らの思考の言語化を試みた先行研究については、拙稿（山口 2020）を参照されたい。ここでは、ブリューゲルによる人々の描かれ方から人物の気持ちを読み取る子どもや、マティスによる抽象画から具象物を見出す子どもがみられた。これらの思考の表現は、さらなる子ども同士の対話を自ら展開させる結果となった。「まとうことも」もまた、言語を用いらない、表現とするならば、そこに対話が生まれる可能性を秘めているのではないか。

24　Rousseau 1961[1762]=1962b: 36

引用文献

伊藤亜紗 2021「よくお似合いです」日本経済新聞 2021 年 5 月 30 日朝刊 , 28.

黄晶 2019「子供服衣料品に対するブランド認知への影響要因に関する研究」鹿児島国際大学大学院博士学位論文 2019 年 9 月 .

新實五穂 2019「19 世紀後期のルーヴル百貨店における男児服」新實五穂『島根県立岩見美術館　服装研究　Vol.1』廣田理紗編 .

松本浩司 2016a「教養としての被服教育を現代化するためのおしゃれ教育学（1)」『名古屋学院大学論集 社会科学編』52（1), 141-154.

_____ 2016b「教養としての被服教育を現代化するためのおしゃれ教育学（2)」『名古屋学院大学論集 社会科学編』52（2), 145-163.

_____ 2016c「教養としての被服教育を現代化するためのおしゃれ教育学（3)」『名古屋学院大学論集 社会科学編』52（3), 53-64.

_____ 2016d「教養としての被服教育を現代化するためのおしゃれ教育学（4)」『名古屋学院大学論集 社会科学編』52（4), 89-107.

山口理沙 2020「保育現場における子どもの「考える営み」の在り方―臨床実験に見る保育者と子どもの対話の可能性―」『聖セシリア女子短期大学紀要』45, 1-7.

鷲田清一監修 2007a『シリーズ・服と社会を考える 1 服と自分』岩崎書店 .

_____ 2007b『シリーズ・服と社会を考える 2 服とコミュニケーション』岩崎書店 .

_____ 2007c『シリーズ・服と社会を考える 3 服の力』岩崎書店 .

Ariès, P. 1960=1980“L'enfant et la vie familiale sous l'Ancien Regime”= 杉山光信・杉山恵美子訳『〈子供〉の誕生：アンシァン・レジーム期の子供と家族生活』みすず書房 .

Baccalario, P. and Jáuregui, E. 2017. “Il manuale delle 50 missioni segrete per sopravvivere nel mondo dei grandi.” Il Castoro, Milano.=2018. 有北雅彦訳 .『モテる大人になるための 50 の秘密指令』太郎次郎社エディタス .

Ewing, E. 1977. “History of Children's Costume” B.T. Batsford Ltd, London.=2016. 能澤慧子・杉浦悦子訳 .『こども服の歴史』東京堂出版 .

Galloni, A. 2007 ‘Interview: ‘Fashion Is How You Present Yourself to the World’（online）January. 18, The Wall Street Journal
https://www.wsj.com/articles/SB116907065754279376. Retrieved 2020-04-20.

Locke, J. 1693=2011. “Some Thoughts Concerning Education”A. and J . Churchill, London.= 北本正章訳 .『ジョン・ロック『子どもの教育』』原書房 .

Rousseau, J-J. 1961[1762]=1962a.“Émile ou de l'éducation” Classique Garnier, Paris, Garnier Frères.= 今野一雄訳 .『エミール（上)』岩波書店 .

Rousseau, J-J. 1961[1762]=1962b.“Émile ou de l'éducation” Classique Garnier, Paris, Garnier Frères.= 今野一雄訳 .『エミール（下)』岩波書店 .